

# TUMSAT-OACIS Repository - Tokyo

University of Marine Science and Technology

(東京海洋大学)

明治中・後期における地方米穀商人の集荷活動：  
八戸町富岡商店の事例

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2008-03-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小岩, 信竹 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://oacis.repo.nii.ac.jp/records/159">https://oacis.repo.nii.ac.jp/records/159</a>

## 明治中・後期における地方米穀商人の集荷活動

——八戸町富岡商店の事例——

小 岩 信 竹

### THE COLLECTION OF CARGO BY THE GRAIN MERCHANT IN MID AND LATE MEIJI JAPAN

—THE CASE OF TOMIOKA SHOTEN IN HACHINOHE—

Nobutake Koiwa\*

(Received August 28, 1997)

In mid Meiji Japan the transformation from feudal state to the industrial nation had proceeded. This process was seen in the various areas, and the inter-regional trade had flourished. But the empirical study about the inter-regional trade has not been made fully. So we can not see how the division of labor especially among the grain production and the other modern industries proceeded in the provincial areas. This article tries to explain how and from where the grain merchant in the local town collected cargo. The local town which we see in this article is Hachinohe. It is one of the main center of the marine product industry in Japan. So we can also see the base of the development of the marine product industry.

#### 1. はじめに

近代の資本主義社会の形成過程は、それまでの農業とりわけ穀作中心の生産体制の中から、商工業ほかの産業が自立し、発展する過程であり、新興産業と穀作中心の農業の分業関係が深まる過程である。それらの新しく発展する産業の中には、水産業や鉱業なども含まれる。したがって、穀作とその他の産業との相互関係の解明は、近代社会形成の基礎の解明につながる。近代の米穀流通を研究する意義もここに求められる。ところで、明治中・後期の日本においては、米穀市場は、外国産米の輸入が開始され、大正期に典型的に見られた、東京・大阪を米穀集散の中心とする国内産米市場に、朝鮮米や台湾米が加わる時期への過渡期として位置付けられている<sup>1)</sup>。研究史上においては、この時期は、米の生産増強政策から、米価維持政策への転換の過程や、大地主の米穀販売活動の季節的な特徴の研究や、米穀をめぐる関税の推移とその意義についての研究が進められたきたが、市場の実態をなす米穀流通のあり方、とりわけ、産地から消費地にいたる国内産米の流れ等の具

\* Department of Fisheries Resource Management, Tokyo University of Fisheries, 5-7, Konan 4-chome, Minato-ku, Tokyo 108-8477, Japan (東京水産大学資源管理学科)。

体的な内容については、解明が進んでこなかった<sup>2)</sup>。特に、明治期の米穀市場の特徴の一つである、流通の地方的性格の内容については、不明の部分が多く残っている。

明治中・後期は日本の産業革命期であり、これまで、米の生産を主とする農業部門とその他の産業部門は、部門相互の関係が問われ、特に米の輸入への依存が明確化するこの時期の農業政策の基調が問題とされ、工業発展の条件を求めべく、農工間の部門相互の関係が研究されてきている<sup>3)</sup>。このような部門相互の対応関係の解明は、経済発展の基礎の理解に不可欠であり、日清戦争以前においては、食糧の海外依存なしに、またそれ以後も、第一次大戦期にいたるまで、95%の自給率を維持しつつ、工業化の基盤形成がなされたことは、すでに明らかにされている<sup>4)</sup>。ところで、近世解体期において、分立する各地域での局地的な経済動向が、幕藩制全体をゆるがす起点となっていたことが指摘されているが、そのような各地域での動きが、産業革命期までにどのように変貌していったのかは、一国レベルでの部門間の解明によってのみでは、明らかにならない。日本の産業革命期においては米価が、比較的高水準に維持されてきていたことが明らかにされているが、それでは高米価水準の中での経済発展は、米作地域およびその周辺地域にどのような影響をおよぼすのか、このような問題が、先行研究の成果の中から提起されてくる<sup>5)</sup>。農民や商人の米穀売買の実態やそれが地域に及ぼした影響の解明には、各地域での具体的な把握が不可欠である。本稿が、米などの穀物の流通に着目するのは、このような理由による。これらの問題の重要性は、すでに地域分析の必要性として指摘されている<sup>6)</sup>。

本稿では、幕末以来水産業が発展し、また近隣で産出する鉱物移出の港でもあった八戸の米穀商人に着目し、主穀生産を他地域に依存して非農業生産を発展させてゆく地域で、米などの穀物供給をになう商人が、どのように他地域より、米やその他の商品を集荷したのかを明らかにし、明治中期における米およびその他穀物の地域間流通の実態を解明することを目的にしている。青森と上野を結ぶ日本鉄道が開通したのは明治24年であったが、八戸は町の近辺の尻内に日本鉄道の駅が設けられ、明治中期より人や貨物の輸送に鉄道が利用できた<sup>7)</sup>。従来、米穀流通の研究史においては、輸送の鉄道利用については、明治末期以降の産地から大都市への輸送の利便性の問題を中心に議論されているものの、早期的な鉄道利用が行われた地域の米穀移動の実態は明らかでなかった<sup>8)</sup>。本稿は、このような研究史上の欠落を埋めることを目指している。本稿は、産業革命期の日本の地域産業発展の基礎としての米穀流通の実体を、日本鉄道沿線で、水産業等の非農業の産業発展を担った地方小都市である、八戸の米穀商人の集荷に視点を置いて解明しようとするものである。本稿で米穀流通の実態解明をはたすために利用するのは、八戸八日町に居住した商人である富岡家文書、特に富岡家に送られた送り券（送り状、贈り券）である。富岡家については後述するが、ここで送り券を分析することの意義に触れておきたい。上に記したように、明治期の米市場については、大まかな特徴の把握はなされているものの、その実態の解明の不十分さが指摘されている。特に、早期に鉄道が開通した地域での明治期の米流通のあり方は未解明である。ここで取り扱う送り券は、鉄道輸送に付随する文書であり、運送業者や金融機関が作成したものである。その残存状況は不明であるが、管見する限り、八戸市立図書館所蔵の富岡家文書に含まれるもの以外に、米穀流通に関する、明治期の送り券

の所在は確認できない。残存史料の年代の片寄りはあるものの、本稿でこの史料を重視するのは、このためである。その内容は後述の通りであるが、本稿では、富岡家文書に所在する、すべての送り券を取り扱っている。以下に見る富岡家に取り扱う米穀等の流通量は、史料の残存状況に規定されているものであり、富岡家に取り扱った量の推移自体を示しているものではないことを付記しておきたい。しかし、富岡家の行動に見られる米穀取引の特徴は、この時期の八戸地域の米穀流通の特徴そのものであったことは他の活字史料などから判明することであり、それらは史料も含めて結びに提示した。

## 2. 荷物送り券に見る富岡商店の集荷

青森県の太平洋岸に位置する八戸は、旧盛岡南部藩から分離して成立した八戸南部藩の城下町であり、旧藩時代より米の消費地であった。しかし、旧藩時代には藩士に給与される家禄としての米が集められ、藩士は必要に応じて城下の米商人に販売していた。その様子は、旧藩士が残した日記などにより知ることができる<sup>9)</sup>。そのような藩士による米販売があるかぎり藩全体の米の需給の問題はあるものの、城下町の商人は、米の供給先の確保にはことかかなかったといえる。しかし、本来気象条件により、米作に適しているとは言い難い八戸藩は、幕末期にいたりイワシの漁獲とその肥料への加工や、鉾物の採掘に活路を見出だし、産出した産物を藩の主導のもとに他領に移出し、藩財政の維持を図っていた<sup>10)</sup>。他の東北地方の諸藩のように、領内で消費する部分以上の産米を、大坂などに移出して藩財政を成り立たせる状態ではなかったことは確かである。

ここで取り上げる富岡家は、八戸の中心街である八日町の商人であり、旧藩時代の実体は不明であるが、明治10年代には呉服、太物、古着を扱っていた。その一端は、次の営業願と実際売捌高調によって知ることができる。

### 営業願

一第一類第二種呉服太物 但壺ヶ年売捌見込高金三千円

此税金三拾円也

一第一類 第二種古着 但壺ヶ年売捌見込高金壺千円

此税金拾円也

右之通税金上納仕候間御許可被成下度此段奉願候以上

明治十五年十一月 三戸郡八戸八日町拾番地

営業人 富岡宇兵衛 印

営業惣代人

富岡三郎兵衛 印<sup>11)</sup>

この営業願には、三戸郡書記に宛てられたもので、八戸町戸長代理心得の奥書きが付けられている。その後、同年12月27日に、三戸郡長岩泉正意によって聞き届けられた。また、明治14年の実際売捌高調は次のようになっている。

前年中自一月至十二月実際売捌高調

一売捌金高三千円也

内 式千五百円也 呉服太物

小 岩 信 竹

五百円也 古着  
右之通前年中売捌高取調候処頭書之通相違無御座候以上  
明治十五年七月 三戸郡八戸八日町拾番地  
営業人 富岡宇兵衛 印  
営業惣代人  
富岡三郎兵衛 印<sup>12)</sup>

この富岡商店は、明治二十年代の後半には、米などの穀物や雑貨を扱う商人に変貌していた。このような変貌をとげた理由は不明であるが、移入商品の販売を行っていることには変わりがない<sup>13)</sup>。

ところで、現存する富岡商店の送り券（送り状、贈券）は、177点である。このうち、同じ用紙に何点かの商品が併記されているものがある。それらをそれぞれ別に数えれば、237点となる。これらの送り券は、商品の送り主が、運送業者を選定し、届け先に商品を送る際に、取引相手に対して送付した証明書である。これには正式な送り券と、仮ないしは副と記された送り券があった。これは、取引の決済に金融機関などが関与する場合、複数の取引相手が生ずるため、商品を引き取る主たる取引相手に正式な送り券を渡し、他の関係者に仮（副）の送り券を送付したために、できた種類である。正式の送り券には、収入印紙が添付されるのが通例であり、仮（副）の送り券には印紙の添付はなかった。用紙は運送業者の様式に従い、書類の作成も、運送業者が作成したと見られるものも多い。仮（副）の送り券には、仮ないしは副と記されているものもある。177点の送り券は、不明なものを除いて、古いものは明治26年11月であり、新しいものは明治31年4月となっている。このように、現存する送り券は5年分にすぎず、最初と最後の年は年度が途中で、実質4年分といってよい。しかし、これらの年は日清戦後の産業革命期にあたり、日本において資本主義的な諸産業が発展をとげた時期である。したがって、これらの送り券は、この時期の地方市場での穀物集荷の実態を知る上で貴重な史料であると考えられる。

米その他の穀物などは、どのようにして八戸に運ばれてきたのか、この点について、送り券その他の記載から判明することを見たい。始めに、送り券の変化を見ておきたい。まず、鉄道開通以前の商品取引に利用された売り仕切りも明治中期にいたっても散見される。その例は次のものである。

仕切  
十月八日送候分 六八  
一金三拾八円八錢 別製精粟  
五石六斗  
十月十五日積送候分  
一金拾六円三十式錢 別製精粟  
式石四斗  
合金五拾四円四十錢  
右金員無残正ニ更取申候也  
明治廿八年

明治中・後期における地方米穀商人の集荷活動

十月十五日 花巻  
川佐藤善助 印

富岡宇兵衛様<sup>14)</sup>

この仕切りは、代金の領収書である。このような書状が発行される前提として送り券が発行される。それは、次の例に見るような形式となっている。

送り券 原価貳百八拾五円

一呎入白米 四斗入 貳拾八個 但し●印  
一同 白餅 四斗入三拾個 但し●●印  
一同 精粟 四斗入三拾個 無印

合計 八十八個也

賃金向払之事

右遞送仕候条貴着御査収可被下候也

明治廿八年一月十三日 陸中稗貫郡黒川口町

出貨主 佐藤善助 印

花巻停車場

内国通運会社扱ヒ 金拾円七十五銭 印

陸奥国八戸停車場

浦山末吉殿揚ケ

同国八戸八日町

富岡宇兵衛様行<sup>15)</sup>

このうち輸送諸掛りであると考えられる金拾円七十五銭の記載は、別の書体で記載され、後に追記されたものであることがわかる。こうした送り券は、次第に輸送業者が作成する画一化された用紙を使用するようになる。それらの送り券は、それを使用する運送会社によってわずかな差はあるものの、記載様式はほとんど統一されていた。そこには年月日、品名のほか、元価、運賃、立て替えの有無、摘要、送り主、扱い店、届け先を記載する欄が設けられている。もっとも、実際に使用された送り券を見れば、元価や、摘要、立て替えの有無の欄は、空欄となっているものが多い。また、銀行が発行した送り券もあり、仙台に本店をもつ八十八銀行の送り券は、荷為替貨物の送り券であることが印刷されており、また、荷為替の振出人と支払人の名称を記載する欄が設けられていた。八十八銀行が関わる送り券は、荷主と届け先が銀行となっており、実際の貨物の発送人は、荷為替の振出人の欄に記された人や会社、商人などであり、受取人は、荷為替の支払人欄の人、会社、商人などとなっている。運送店について見れば、花巻の北上会社代理店は、花巻停車場前がその住所である。内国通運は日本通運の前身で、その支店のほとんどは、鉄道の駅前にあった。また、そのマークは今日でも使用されているものである。盛岡の西村運送店も停車場前が住所であった。このように、富岡商店に残存する送り状に記載されている運送店のほとんどが、鉄道の駅前に所在した。

明治 29 年に黒沢尻の小沢喜三郎より富岡宇兵衛に送られた米の送り状（送券）は、内国通運の名称が印刷されているが、運賃欄には、「八戸停車場迄先払拾三円七拾貳銭」と記さ

れている。このような送り状の記載や運送店の所在場所などから考えて、岩手県の花巻や水沢、黒沢尻などの各地からの貨物輸送は、鉄道によったものであることがわかる。明治30年の水沢の福岡兵太郎が出荷した米の送り券には、辰五十七号車や、丑百五十号車の記載があり、また、同じく水沢より出荷された米の送り券（高橋文太郎のもの）には、号車の記載欄があり、午四百三十八号車と記入されている。こうして、日清戦後の八戸の富岡商店の穀物の集荷は、鉄道に依存し、また実際には、鉄道と共存する運送会社によって担われていたことがわかる。

先に佐藤善助が発行した仕切りは、販売代金の領収書であることを見たが、代金支払いの方法も近代化された。それらには、銀行を利用し荷為替によって支払いを行う方法と、郵便局を利用する方法があった。富岡商店について現存する証書によれば、富岡商店は、花巻あてに郵便局経由の為替を振り出している。振出日付印の欄には、二十七年六月二十日の八戸郵便電信局の印がおされ、振宛局名には陸中国花巻と記入されている。為替番号は記入されているが、差出人住所氏名、受取人住所氏名は空欄となっている。郵便電信局長の氏名の記載と捺印があるので、実際に使用されたものと考えられるが、ある程度遠隔の地域間の決済に、銀行や郵便局の金融機能が活用されたことがわかる。

鉄道の早期の開通は、県域をこえた商品流通をうながしたとはいえ、八戸の富岡商店の事例を見る限り、集荷範囲が広域化したと評価することは困難である。県域は異なり旧藩域も異なるとはいえ、岩手県内と八戸は、旧南部藩の本藩と支藩の関係にある。鉄道や、それに付随する運送業者の出現や、金融機関の機能は、中央市場を介することがない、地域間の流通を支えたと評価することができる。すなわち、鉄道やそれに付随する機関の出現は、八戸と旧南部領の岩手県下の諸地域のような、ある程度遠隔ではあっても、相互補完的な生産物を持つ地域間の分業関係の進展を支えたと評価できる。

### 3. 金融機関の関与

富岡商店は、当初、八戸に開業していた第百五十国立銀行との取引を行っていた。明治21年に、富岡宇兵衛は第百五十国立銀行に、根抵当書入証を入れている。その内容は、三戸郡五戸村と同郡長苗代村に所在する水田を根抵当に入れ、必要に応じて、五百円までの借用ができるというもので、借用金の利子は、100円につき、一日4銭以下、3銭以上とし、その時々を決めるというような規定が付されていた。

根抵当書入証は、1年間有効であり、満期後には再度、契約が行われたが、翌明治22年のものも残っている。その内容は次のものである。

根抵当書入証

一金参百円也

右金貴行ト当座預金借越約定ヲナスニ付前書金額ヲ極度トシ入用之都合ヲ以テ借入ルコトヲ約定セリ

一此金額ニ対シテ左記之耕地ヲ根抵当ニ差入置候儀相違無之候事

(中略)

一此約定ハ満壹ケ年則明治廿三年五月九日迄トス満期ニ到レハ双方協議之上継続スル事

明治中・後期における地方米穀商人の集荷活動

アルヘシ

- 一借入金之利息ハ其時々取極ムヘシト雖共金百円ニ付一日四銭以内三銭以上ヲ以テ時々定ムルモノトス
- 一金操之都合ニ依リ貴行ニ於テ約定金額内ト雖共貸渡拒絶スルコトアルモ異議申間敷候事
- 一右約定壱ケ年ト定ムルト雖モ双方之都合ニ依リ解約セント欲スル時ハ協議之上約定取消ヲ事得ヘシ
- 一一日之取引ハ必ラス六十日ニ以内於テ元利息之差引ヲ行ヘシ
- 一此約定満期ニ到レハ借入金之利息悉皆返却スヘシ万一行届之節抵当品売払候歟或ハ引渡候共貴行之望次第取計尚不足アルトキハ証人ニ於テ引受弁償可致候右根抵当書入証書仍而如件

陸奥国三戸郡八戸町大字八日町拾番地

明治廿二年五月九日 借用人 富岡宇兵衛 印

保証人 富岡文吉 印

第百五十国立銀行

頭取 富岡新十郎殿<sup>16)</sup>

なお、途中、省略した部分には、根抵当に入れられた不動産が列記されているが、それらは、6か所の畑と1か所の宅地である。上に見た根抵当書入証は、金額が300円で、前年の金額を下回っていたが、明治23年には、富岡宇兵衛は、第百五十国立銀行に、200円増額の仮約定証を渡している。それは次のものである。

仮約定証

明治貳拾貳年五月九日貴行ヨリ借越金三百円也ヲ極度トシ保証根抵当品差入約定取結置候処更ニ金貳百円増加へ借越仮約定致候儀相違無之候然ル上ハ急而本約定取結候約定書之通履行可致候仮約定証書依而如件

三戸郡八戸町大字八日町貳拾番戸

明治廿三年五月十日 富岡宇兵衛 印

第百五十国立銀行

頭取 富岡新十郎殿<sup>17)</sup>

これによって、前年の金額と同額になった。なお、さきの根抵当書入証書の銀行頭取名の前に、「明治廿五年三月廿四日取消」の文字と八戸区裁判所の公印がある。また、文書の後ろに、「前書之金額元利正ニ請取候也 明治廿五年三月廿一日 第百五十国立銀行頭取大久保平蔵」の記載がある。これらの記載によれば、富岡商店と第百五十国立銀行の根抵当と資金の借入れに関する契約は、明治25年に終わったものと考えられる。以後、富岡商店は、階上銀行との取引を行ってゆくことが、送り券の記載から推測できる。

ところで、米穀取引と金融機関の関係の主要なものは、購入代金の支払いに関するものであり、富岡商店も銀行を通じて取引の決済を行っていた。その方法の一つは、荷為替手形の利用であった。明治30年の荷為替手形による決済の一例を見れば、次のようになっている。まず、荷為替手形は以下のものである。

第一ノ二四号

荷為替手形

一金五百参拾五円也 印

此荷為替抵当品

白米四拾式石四斗 印

此原価金六百七拾五円也 印

右金額当地第九十銀行ニ於テ荷為替取組正ニ受取候ニ付此代り金明治三十年十一月廿九日限於其地株式会社階上銀行又ハ其指図人へ荷物引替無相違御払渡可被下候也

明治三十年十一月廿五日

盛岡市茅町

巖岩儀助 印

富岡重(ママ)三郎殿<sup>18)</sup>

この荷為替手形には副証書があり、それは、以下に見るように、銀行に宛てられていた。

荷為替手形副証書

白米四拾式石四斗 印

此原価金六百七拾五円也 印

但運搬中天災其他危難ニ陥リ損失相立候共総而拙者方ニテ引受貴行ニ少シモ損失相掛申間敷候

右ハ本日別紙一ノ二四号手形ヲ以テ取組タル荷為替之抵当品ニ相違無之候万一名宛人富岡重三郎殿方ニテ手形不渡り致シ候節ハ右為替荷物ハ貴行ニ於テ御勝手ニ御売却之上荷為替金及延滞利子トモ御取立可被下若シ右ニテモ不足相立候節ハ証人引受別段弁償可致候依而副証書如件

明治三十年十一月廿五日

盛岡市茅町

巖岩儀助 印

盛岡市茅町

零石長助 印

盛岡第九十銀行御中<sup>19)</sup>

水沢銀行他の銀行が関与する荷為替手形に合せた為替手形副証も、同様の内容となっている。なお、水沢銀行の副証には、支払いが遅延した場合の利子が明記されている。それは、次の表現である。

一名宛人為替手形ノ支払ヲ拒ミタル時又ハ期日前ニ支払停止若クハ破産ヲ為シタルトキハ貴行又ハ貴行ノ指図人ハ前記ノ貨物適宜御売却ノ上為替金額運送賃庫敷料延滞日歩(百円ニ付一日金五銭)其他諸掛り御引去可被成候若シ不足相生候ハ、速カニ弁償可致候<sup>20)</sup>

こうした荷為替付きの米穀取引の送り券を見ると、荷主（荷出し人）と送り先が銀行になっている場合と、富岡宇兵衛などの商人等の場合がある。ここで注目すべきは、荷主と送り先が銀行になっている事例である。いま、富岡商店関係の送り券の中から、それらを

探せば、荷主となっている銀行は、安田銀行支店（1例）、水沢銀行（20例）、第九十銀行（1例）、第八十八銀行（1例）となっている。これによれば、水沢銀行が大半を占めている。送り先が銀行になっている例は、1例が八戸商業銀行となっているほかは、すべて階上銀行が宛先となっている。これらを見れば、水沢銀行から階上銀行にあてた送り券が多いことがわかる。

このような銀行間の送り券の送付は通例、印紙が貼付され、正式の証書として取り扱われている。この場合には、仮ないしは副の文字が記入されたもう一枚の証書が作成され、実際の商品の取引人相互間に交わされていた。この仮送り券には印紙は貼付されていなかった。こうした銀行間の送り券の送付がなされれば、商品の買い主は、荷為替の期限内の払い込みを実行しなければ、荷物の受取りが不可能になる。また、このような荷為替取引には、隔地間の銀行相互の決済のネットワークの存在が不可欠である。

荷為替手形の払い込みが滞った場合には、貨物の引き渡しも難航した。富岡家史料には富岡商店自体のものではないが、八戸で運輸業を営んでいた富岡新太郎に宛てた、階上銀行の大正5年の次の書類が残っている。

富岡新太郎殿

拝啓 写一枚書面を以て楢山金之助、楢山臆松之両氏より貴店へ保管之貨物ニ関シ質権実行之旨御通知申上置度訴訟之都合上質物之引渡すを先んずる次第ニ有<sup>(カ)</sup>間左記之物件御引渡相成度此段御請求まで特ニ告知候也

一大豆参百拾五俵

一蕎麦百六拾俵

以上<sup>21)</sup>

この証書には、大正5年6月（日は判読不能）と、「青森県三戸郡八戸町三日町 株式会社階上銀行」の名および電略と電話の番号が、ゴム印で捺してある。また、これと対になる文書が残っている。それは次のものである。

保管人

拝啓 予て楢山金之助及楢山臆松之両氏より保管致置大豆蕎麦ニ関シ今般質権実行之為め山井弁護士へ委任ニ決定致候間御承知相成度此段得ニ及御通知候也<sup>22)</sup>

大正5年（月日判読不能）と、住所、銀行名のゴム印は前の書類と同様である。

これらは、荷物の本来の受取人である楢山金之助と楢山臆松の両名が、手形の払い込みができず、階上銀行が、荷物の保管人である富岡新太郎に、引き渡しを求めているものである。この例は、銀行が貨物に対して、質権を行使しようとしている例である。他の商人などが、貨物の荷受け人に代わり、手形を保証する場合もあった。次の例は、大正5年3月のものであるが、前の例に登場した楢山金之助に支払い義務がある手形を富岡宇兵衛が、引き受けた物である。

荷為替引請契約書

一貴殿出荷鈴木運送店大正四年十二月十九日発送の糯玄米壺百拾四俵代荷為替金六百八拾五円八拾参銭也

一荷請期日大正四年十二月廿五日

一荷請人楢山金之助殿

右荷受人受払延引相成申訳ケ無之候得共今回拙者ヨリ更ニ延期申入本月拾七日限り本人ニ不抱拙店ニ於テ無相違一時立替荷受払可仕候決テ御迷惑相掛申間敷候為後日引請書依テ如件

大正五年參月八日

八戸駅前

正運輸店代 印

富岡宇兵衛 印

下野氏家町

久保井市兵衛兵殿<sup>23)</sup>

この証書には印紙が貼付されており、印紙と印形の上には、取引の終了を示す墨の抹消の線が書かれている。証書の中に、富岡商店が引き受ける前に、既に、払い込みが遅れていることを詫げる文言がある。即ち、富岡商店が運輸店の代理を名乗って荷為替の一時立て替え払いを引き受ける前に、荷受け人の楢山金之助は、支払いを遅らせていたことがわかる。このように、購入代金の支払いが難航した場合の対応の仕組みを、金融機関は作り上げていた。

なお、銀行を介する資金の流れは荷為替手形によるものだけではない。富岡商店の史料には、大正の文字が印刷された、未使用の、階上銀行宛ての電信為替送金請取書の用紙が残されている。

こうして、明治中・後期には、富岡商店は、階上銀行を中心とする金融機関を利用し、また銀行も、米穀商品の取引に、自ら荷受人になるなどまでして、取り組んでいた。八戸の富岡商店への発送元である岩手県の各地、特に水沢に所在する水沢銀行なども、自ら発送元になるなど、商品移動と売り上げ代金の回収のリスク回避に万全を期しつつ取り組んでいた。もっとも、すべての米穀取引において銀行が商品の発送元や荷受け人の役割を果たしたわけではなく、実際の売買当事者の取引をサポートする形式の関与も多かった。

#### 4. 集荷活動の特徴

ここで、残された送り券から、富岡商店の集荷の特徴を見たい。ここで、送り券の送出处（送出人の住所所在地）に着目して、その分布を見たい。同一の用紙に複数の商品が書かれているものを別に数え、総計 237 点で見れば、不明分をのぞき、花巻 82、水沢 62、黒沢尻 29、前沢 23、盛岡 11、宇都宮 9、七戸 8、金ヶ崎 8、三戸 2、一関 1、となっている。これらを県別に見れば、そのほとんどが岩手県であり、その他は、青森県が七戸と三戸の 12 点、栃木県が宇都宮の 9 点となっている。不明は 2 点である。青森県内からの集荷は、三戸の佐藤善五郎からの粟の購入と、七戸の戸館第吉からの稗や叭の購入である。三戸や七戸は、青森県域とはいえ、旧盛岡南部領やその支藩の支配地であった。また、栃木県の宇都宮からの集荷は青木仙太郎と湊屋国太郎の二人から、小麦粉や粉（これも小麦粉か）の購入である。他のすべてが隣県の岩手県からの購入である。なお、岩手県の花巻からの移入のうち、3 点は、水沢から出荷している。八戸の富岡商店の穀物入荷は、旧盛岡

南部領の岩手県の諸地域からのものが、そのほとんどで、青森県内からの移入もわずかながらあるものの、それらも旧南部領からのものであったといえる。これらから、県域にとられない商品流通が行われていたこと、しかしながら、日本鉄道沿線の岩手県内の米作地帯に、米穀供給のほとんどを依存していることから明らかなように、特定地域との結び付きが強固であったことがわかる。

輸送の形状（俵の容量など）がほぼ規格化されていた、玄米、白米、糯米の年度別の集計を見れば、表1のようになっている。これによれば、白米が玄米を超えている。表4からもわかるように、糯米でも白米が多くなっている。

次に個々の商品を見てゆく。表2によれば、玄米は、花巻、盛岡からの購入が多いが、表3のように、白米は、水沢、花巻からの購入が多い。なお、白米の花巻での購入分の一部は水沢から出荷されているが、ここでは花巻に含めている。表4によれば、糯米は玄米と同じく花巻、盛岡からが多い。一件の取引で購入される量は、玄米、白米ともに、30石以上の取り引きが多く、白米(54/107)、玄米(11/26)ともに約半数を占めている。ただし、糯米では、その比率は低い4%(1/24)。しかし、糯米でも半数が20俵(8石)以上の取り引きとなっている。なお、この時期の輸送については、貨車積みが大部分であると考えられるが、小沢喜三郎からの送り券によれば、四斗入りの米俵が88俵で貨車1台(35.2石)であった。明治29年3月の黒沢尻から八戸までの貨車1台(白米88俵)の運賃は、11円10銭であった。このように、富岡商店の米の取り引き規模は1車規模程度以上が半数であった。

残された送り券は、正式のものが大半である。銀行相互間の正式の送り券も、実際の貨物の買い手である富岡商店に渡されていること、荷為替有りの送り券で、直接富岡宇兵衛に宛てたものが多いことなどが、正式の送り券の多さの原因となっているものと思われる。

米について輸送量が多いのは、小麦粉である。表5に見るように、小麦粉の輸送の形状はまちまちであったが、7.8貫目入りや8貫目入り、また50斤入りが多かった。また、その購入量もまちまちで、1件1個から、3斗入り40俵までであった。小麦粉の購入先は米と同じく、水沢、花巻、黒沢尻などであったが、宇都宮からの購入が目立つ。これは、鉄道利用の利便性を示すものであろう。また、小麦の購入もわずかにあるが、それらはすべて、宇都宮の青木仙太郎からのものである(表6)。

表7からわかるように、粟についても、購入先は米と同様で、花巻、黒沢尻が多い。粟については、青森県内の三沢からの購入もある。また、粟は、精製ずみのものが大半である。その購入量は、1件あたり、40石を超えるものから2俵まで多様である。

表8に見る、稗の取り引きは米他とはやや性格を異にする。稗は、青森県内の七戸の戸館第吉との取り引きが多く、その取り引き規模が大きい。1件100俵以上が多く、200俵もある。これは、近距離であることが影響しているとも考えられるが、取り引きが明治30年に集中しているので、富岡商店が大量に買い付け、大量に輸送したものであろう。

表9からわかるように、ゴマは、水沢の芳賀兵吉などから買い入れていた。花巻、黒沢尻からの購入も米と同様である。その量は一回に四斗入り15俵の取り引きもあり、1,2

俵のこともあった。これは、主食ではない少量ずつ消費するゴマの取り引きとしては、大量の取り引きの部類に入るのではないかと思われる。荷為替の有無は不明である。

ここで、送り券から判明する価格動向に注目したい。送り券の中には、商品の元価が記入されているものがある。これらをまとめると、表 10 のようになる。なお、複数の商品価格が一括して記載され、個々の商品価格が判明しないものや、年月の判明しないものは省略した。また元価が判明する送り券を中心に荷為替の金額が記されているものがあり、それらもあわせて表示した。これによれば、商品の価格が判明する例は、水沢銀行などの銀行が発送人になっているものが多い。これは、荷為替の振り出しが金融機関から、米の販売人への資金貸付に当たるので、特に銀行が、貸し出しについて、確実な手順を踏んでいることの反映である。米穀発送の受け手に銀行の名が見えることも、資金の回収の確実性を求めていることである。また米の中では白米が多いが、これは富岡商店の白米購入の多さに対応している。米とのみ記載されているものは玄米と思われるが、白米より低価格となっている。一石当たりの価格は、明治 30 年代の秋から、高騰する。これは東京など、各地の相場と同じ動きである。なお、富岡商店の購入米は白米が多いが、その価格は東京の玄米価格を越えており、岩手県の米の生産地帯にとっても、八戸への白米販売は、メリットが多かったものと考えられる。荷為替価格の元価に対する比率は、75% から 80% で、その数値は一定していない。この比率は、米の受け手側の銀行が、販売代金を回収し、送り手側の銀行に送金することを前提とし、事故があった場合の危険を考慮した数値になっているものと思われる。しかし、荷為替のみでは、代金の決済がすべてすんだことにはならず、残額の処理の問題が残ることも示している。

## 5. 結 び

以上、明治 30 年前後の、米や雑穀の購入先やその取り引きの実態を、八戸の中心部に店舗をかまえる富岡商店の仕入れに注目して考察を行ってきた。富岡商店は、鉄道を利用し、銀行他の金融機関の荷為替取組みやその他の金融機能を活用し、岩手県の各地から米や雑穀の集荷を行っていた。

米の集荷について見ると、その集荷は、大量で、鉄道を利用し、白米、玄米を問わず、一件の取り引きが 30 石を超えるものが半数以上であった。青森県特に津軽地方も米の産地であり、青森がその集散の中心地であったが、八戸と青森は日本鉄道で結ばれているにもかかわらず、富岡商店の購入米には津軽産米はなかった。このことは米の取り引きが、鉄道の開通にもかかわらず、特定の集荷ルートにかたよることを示しているものと考えられる。特定の集荷ルートの重なり合いが、全国市場のネットワークを形成しているといえる。これは、江戸時代の大坂などの特定の中心地に依存した市場構造とは異なっている<sup>24)</sup>。なお、八戸の米穀集荷が、岩手県産米に片寄る理由の一つは、この時期の交通事情によると考えられる。この点に関して、次の青森県の有力新聞であった東奥日報の記事が、参考になる。

「……昨日の紙上に於て、既に汽車運賃の細表を報じたるが、猶ほ實際取扱の模様を問合わせたるに、一台車五頓八十四俵積にて、野辺地まで貳円八拾錢、尻内二十二錢三厘、盛

岡三十八銭，仙台五十四銭となりて，津軽地方の五所川原より八十銭，弘前・黒石より六十銭と云へる運賃に比すれば，頗る低廉なりと云ふ。去れば，南部地方の如きは，高価なる津軽米を，当青森より輸送するよりも，遠く岩手県花巻・一ノ関地方に趣きて，米穀の買入れを為して，八戸・五戸より野辺地近傍まで，輸入を為し居る趣きなり。……」<sup>25)</sup>

この記事は，明治24年のものであり，奥羽線は未だ開通していなかった時期のものである。津軽産米は，米どころの五所川原や，弘前，黒石から青森までの運賃が高く，八戸や五戸，野辺地の米の需要地帯では，鉄道を利用した，岩手県の各地からの輸送が，安かったということである。奥羽線の開通は青森・弘前間が明治27年であったが，福島まで通じて既設の鉄道とつながったのは，明治32年であった。五所川原・川部間は，大正に入ってから陸奥鉄道が開業した。鉄道開通以前の陸上交通は，馬による駄送が主流であり，先の記事の運賃は駄送によるものである。上に見た富岡家の岩手県からの米穀の集荷は，八戸をはじめとする南部地方にとっては一般的なことであったといえる。また，その集荷先の選択は，運賃の上から見ても，合理的な選択であったといえる。鉄道の開通による，立地条件の変化が，富岡家をはじめとする八戸地方の米穀商人の集荷活動を規定したといえる。

なお，このような地域的な特質は昭和期に入ってからも続いていた。そのことは，仙台鉄道管理局が八戸の商品流通を分析し，昭和3年に公刊した報告から，見る事ができる。その報告は，米について，以下のように論じている。

「八，米

	海運	1545 噸		海運	一噸
発送	鉄道	614 噸	到着	鉄道	6044 噸
	計	2159 噸		計	6044 噸

本品は当地並東沿岸の需要により水沢，日詰，花巻，黒沢尻地方より鉄道便に依り輸入せらる。一部地方の需要を充したる上は船舶便に依り東沿岸地方に送出せらる、ものなり  
由来岩手県は耕田に乏しく就中九戸郡の一部の如きは米の収穫皆無にして，稗，馬鈴薯等を常食し又は米飯との混合食をなすもの尠からず 概ね当港よりの供給を仰げるものなり

荷造 唎入 四斗俵九十八斤内外

荷動最盛期 自十月至翌年一月」<sup>26)</sup>

これによれば，昭和初年の八戸地域の米の流通の状態は，岩手県内の各地から鉄道で移入し，八戸地域の需要を満たした後，海運を利用して，太平洋沿岸の周辺地域に移出している。ところで，八戸市立図書館所蔵の富岡家文書の中に，2通であるが，明治28年に，久慈の田代村，村松松五郎へ白米10俵，明治31年に，田村源蔵に白米を10石販売している証書がある<sup>27)</sup>。したがって，富岡家が卸売り機能を持っていたことは，確認できる。このような富岡家の卸売り機能は，八戸地方自体が担っていた機能であったことがわかる。

ところで，富岡商店の史料には少数ながら，内国通運が富岡商店に渡した貨物受取証が残っている。これは，富岡商店の依頼により，内国通運が輸送を引き受けた貨物の受取証であり，八戸から他地域へ輸送する商品名が書かれている。それらには，唎などの薬製品

とならんで、水産物がある。それは、花巻の小田島文四郎にあてた、魚油（明治 28 年）、盛岡の巖岩重右衛門にあてた箱入り鮮魚（明治 28 年）である<sup>28)</sup>。大量の米の旧藩域外からの供給体制の確立が、主穀生産にとらわれない水産業ほかの発展の基礎になっているといえよう。このような分業関係の形成が、鉄道を利用し、特定の地域との結び付きをもたらしながら進行していることが、明治中期より鉄道利用が可能であった東北の小都市の、米穀取引の特徴であったといえよう。

注

- 1) 持田恵三『米穀市場の展開過程』、東京大学出版会、1970 年等参照。
- 2) 大内 力『農業問題』、岩波書店、1951 年（改訂版、1961 年）は、米価政策の転換を論じ、小農保護政策が登場する過程を解明している。守田志郎『地主経済と地方資本』、御茶の水書房、1963 年、松元宏「明治・大正期における地主の米販売について」『一橋論叢』、60-5、1968 年所収、丹羽邦男「一在村地主の小作米販売」、『商経論叢』、1971 年所収は、米販売の事例研究であるが、個別地主の経営分析をおこなった諸研究によっても、米販売の実態が解明されている。川東蟬弘『戦前日本の米価政策史研究』、ミネルヴァ書房、1990 年は、前半で、日露戦後の米穀関税論争を扱っている。大豆生田稔『近代日本の食糧政策』、ミネルヴァ書房、1993 年は、米の輸出入や、米穀関税について論じている。
- 3) このような問題意識は、農業自体の発展の解明をめざす論著に明確に見られる。速見佑次郎『日本農業の成長過程』、創文社、1973 年、などがその典型である。工業化の進展の中での農業の位置を問う研究も多い。南 亮進『日本の経済発展』、東洋経済新報社、1981 年、第 IV 章、「工業化の中での農業」や、石井寛治『日本経済史』第二版、東京大学出版会、1991 年（初版、1976 年）、第四章五「農業の動向と地主制」等参照。
- 4) 速見、前掲書、156 頁。
- 5) この点は、大内 力『日本資本主義の農業問題』改訂版、東京大学出版会、1962 年、180 頁以下が強調するところである。
- 6) 石井寛治「国内市場の形成と展開」、山口和雄・石井寛治編『近代日本の商品流通』、東京大学出版会、1986 年所収等参照。
- 7) 八戸を含めた青森県の近代史については、拙稿「地方史研究の現状 青森県 近代史研究の現状」、『日本歴史』、556、1994 年所収で紹介した諸文献を参照されたい。
- 8) 持田前掲書、第四章、82 頁等参照。持田氏は、鉄道の発達で地方間の米の移動をうながすことについても指摘を行っているが、その実態は未解明である。
- 9) 青森県文化財保護協会編『八戸藩遠山家日記』、同会、1992 年等にそれらの記載がある。
- 10) 三浦忠士「八戸藩における藩政改革以後の海運と産物流通」、『地方史研究』221、1989 年等参照。なお、これらの事実を、八戸藩士の記録等によっても明らかにできるが、詳細についての研究は、これからにかかっている。
- 11)～12) 八戸市立図書館所蔵、富岡家文書。
- 13) 明治 41 年刊行の、『日韓商工人名録』には、全国の営業税 10 円以上の商工業者の名前が記録されているが、そこには富岡宇兵衛の名はない。八戸町における富岡姓では、八日町の富岡金次郎が、古着商及綿製造業として掲載され、十三日町の富岡新十郎が、海産物及肥料商として掲載されている。二人の営業税額と所得税額は空欄となっており、不明である。なお、富岡新十郎は、百五十国立銀行の頭取をつとめた。富岡宇兵衛が商工人名録に記載されていないのは、営業規模が掲載に値しないと考えられたためであろう。なお、この人名録には、八戸町の米穀商として、18 名が掲載されている。その名前と税額等は次の通りである。空欄は記載なしを示す。

氏名	居住地	営業税額(円)	所得税額(円)	兼業他
瀧澤治兵衛	新荒町	561.01	47.75	米、雑穀
山本勝次郎	十八日町	18.78	29.9	八戸商業組合員
関野 正七		42.97	27.74	

明治中・後期における地方米穀商人の集荷活動

山本武次郎		17.84	16.44	
瀧澤 末吉	新荒町	17.37	19.91	
西川銀三郎		9.79	16.29	
鴨澤直次郎		9.78	15.68	
下斗米此吉	荒町	9.09	20.41	雑肥料
石橋 モヨ		4.83	16.91	
大野直太郎	新荒町	4.66	16.1	
内田辰五郎		4.08	14.4	
澤藤平次郎		3.01	14.3	
内田興兵衛	荒町	2.11	11.6	米, 雑穀商
村井 米吉	十八日町			米穀, 人造肥料, 八戸商業組合員
福井常次郎	港本町			海産物委託販売, 回漕業
八田徳五郎				米, 雑穀
田村 定吉	新荒町			米, 雑穀
石萬商店	二十三日町			雑肥料, 食塩, 石油, 洋酒

- 14)~23) これらはすべて、八戸市立図書館所蔵の、富岡家文書である。本稿所収の表も富岡家に関するものは、同館所蔵史料を加工して作成したものである。
- 24) 近世の米市場に関する研究として、宮本又郎『近世日本の市場経済』、有斐閣、1988年、本城正徳『幕藩制社会の展開と米穀市場』、大阪大学出版会、1994年等参照。
- 25) 『東奥日報』明治24年12月12日。
- 26) 仙台鉄道管理局運輸課『東北の港湾（三陸沿岸の部）』、同課、1928年、41~42頁。
- 27)~28) 富岡家文書。富岡家文書には、米やその他の販売関係の史料の残存は少なく、富岡家の米販売の実態は不明というほかない。しかし、八戸地方の米穀商が、岩手県より米穀を集荷し、同地での需要を満たした上、太平洋沿岸の各地に移出したことが、文献資料に見えるので、富岡家の史料は、八戸地方の集荷の実態を活写しているものといえよう。

〈付記〉 本稿脱稿後、大豆生田稔「道路網の整備と米穀市場—秋田県南部の場合—」、高村直助編著『明治の産業発展と社会資本』、ミネルヴァ書房、1997年所収が発表された。本稿と関わる論点が含まれているが、同稿を前提とすることができなかったことを記しておきたい。

表1 米購入各年合計

	玄米	白米	糯米
明治26年	70.2	72.2	0
27	94	134.05	12
28	34.8	341.2	29.2
29	149.9	536.8	102
30	217.32	901.2	33.6
31	16.8	135.6	0
不明	1.35	85.6	77
計	584.37	2,206.65	253.8

(出典) 富岡家文書

1) 単位, 石

2) 玄米は米とだけ表示されているものも含む。

小 岩 信 竹

表 2 富岡商店

年 月 日	商品名	数 量	荷 主	届 先
明治 26. 11. 4	玄 米	35 石	小田島文四郎	富岡宇兵衛
26. 11. 21	米	35.2 石	小田島文四郎	富岡宇兵衛
27. 1. 6	玄 米	100 俵 (三斗五升入)	小田島文四郎	富岡宇兵衛
27. 2. 2	玄 米	100 俵 (三斗五升入)	杉本与助	富岡宇兵衛
27. 3. 26	玄 米	60 俵 (四斗入)	小田島文四郎	富岡宇兵衛
28. 9. 20	玄 米	87 俵 (四斗入)	雫石長助	富岡宇兵衛
29. 6. 22	玄 米	70 俵 (三斗五升入)	藤田源助	富岡宇兵衛
29. 6. 29	玄 米	100 俵 (三、五入)	富岡宇兵衛	富岡宇兵衛
29. 7. 3	米	2 俵 (四斗入)	小沢喜三郎	富岡宇兵衛
29. 10. 9	玄 米	44 俵 (四斗入)	高橋文四郎	富岡宇兵衛
29. 12. 16	玄 米	74 俵 (四斗入)	佐々木精吉	富岡宇兵衛
29. 12. 19	改良米	106 俵 (四斗入)	吉田庄四郎	富岡宇兵衛
30. 1. 7	改良米	106 俵 (四二入)	水沢銀行	階上銀行
30. 1. 27	玄 米	106 俵 (四斗入)	水沢銀行	階上銀行
30. 1. 29	玄 米	58 俵 (四斗入)	小沢喜三郎	富岡宇兵衛
30. 9. 20	玄 米	87 俵 (四斗入)	小原喜太郎	富岡宇兵衛
30. 10. 26	玄 米	88 俵 (四斗入)	水沢銀行	階上銀行
30. 12. 10	米	10 俵 (四斗入)	山地利右衛門	富岡宇兵衛
30. 12. 12	米	10 俵 (四斗入)	山地利右衛門	富岡宇兵衛
30. 12. 24	玄 米	63 俵 (四斗入)	水沢銀行	階上銀行
30. 12. 25	米	10 俵 (四斗入)	山地利右衛門	富岡宇兵衛
31. 3. 28 (旧)	米	8 俵 (四斗入)	山地利右衛門	富岡宇兵衛
31. 3. 30	米	13 俵 (四斗入)	山地利右衛門	富岡宇兵衛
31. 4. 5	米	15 俵 (四斗入)	山地利右衛門	富岡宇兵衛
31. 10. 2	米	6 俵 (四斗入)	山地利右衛門	富岡宇兵衛
年月日欠	玄 米	100 俵 (三斗五升入)	巖重右衛門	富岡宇兵衛

(出典) 富岡家文書

1) 米とだけ表記されているものも含めた。

明治中・後期における地方米穀商人の集荷活動

玄米入荷

出荷人	入荷人	運送店	荷為替の有無	正, 仮(副)の別	送出地
高橋文四郎	富岡宇兵衛	北上会社代理店	不明	正	花巻
		北上会社代理店	不明	正	花巻
		北上会社代理店	不明	正	花巻
		内国通運	不明	仮	花巻
		北上会社代理店	不明	正	花巻
		内国通運	不明	正	盛岡
		不明	有	正	盛岡
		北上会社代理店	不明	仮	花巻
		日本運輸	不明	仮	黒沢尻
		北上会社代理店	不明	仮	水沢
		前沢通運	不明	正	前沢
		黒沢尻代理店	不明	副	黒沢尻
		北上会社代理店	有	仮	水沢
		北上会社代理店	有	正	水沢
		日本運輸	不明	副	黒沢尻
		北上会社	有	仮	盛岡
		北上会社	有	正	水沢
		大橋七右衛門	富岡宇兵衛	北上会社	不明
北上会社	不明			仮	金ヶ崎
不明	有			正	水沢
北上会社	不明			正	金ヶ崎
北上会社	不明			正	金ヶ崎
北上会社	不明			正	金ヶ崎
北上会社	不明			正	金ヶ崎
北上会社	不明			正	金ヶ崎
成瀬運送店	不明	仮	盛岡		

小 岩 信 竹

表 3 富岡商店

年 月 日	商 品 名	数 量	荷 主	届 先
明治 26. 9. 17	白米	100 俵	村上徳松	富岡宇兵衛
26. 12. 4	白米	92 俵 (三斗五升入)	小田島文四郎	富岡宇兵衛
27. 1. 15	白米	100 俵 (三斗五升入)	杉本与助	富岡宇兵衛
27. 1. 24	白米	100 俵 (三斗五升入)	小田島文四郎	富岡宇兵衛
27. 2. 9	白米	70 俵	小田島文四郎	富岡宇兵衛
27. 3. 2	白米	88 俵 (四斗入)	小田島文四郎	富岡宇兵衛
27. 10. 27	白米	10 叭 (四斗入)	杉本与助	富岡宇兵衛
27. 10. 27	白米	7 叭 (三. 五入)	杉本与助	富岡宇兵衛
28. 1. 13	白米	28 個 (四斗入)	佐藤善助	富岡宇兵衛
28. 1. 14	白米	29 俵 (三斗五升入)	杉本与助	富岡宇兵衛
28. 1. 14	白米	32 俵 (四斗入)	杉本与助	富岡宇兵衛
28. 1. 16	白米	74 俵 (四斗入)	杉本与助	富岡宇兵衛
28. 1. 16	白米	11 俵 (三斗五升入)	杉本与助	富岡宇兵衛
28. 1. 24	白米	50 個 (四斗入)	佐藤善助	富岡宇兵衛
28. 2. 26	白米	48 個 (四斗入)	佐藤善助	富岡宇兵衛
28. 8. 18	白米	68 叭 (四斗入)	小田島文四郎	富岡宇兵衛
28. 9. 13	白米	43 叭 (四斗入)	小田島文四郎	富岡宇兵衛
28. 10. 17	白米	88 俵 (四斗入)	小田島文四郎	富岡宇兵衛
28. 10. 24	白米	88 俵 (四斗入)	小田島文四郎	富岡宇兵衛
28. 10. 30	白米	106 叭 (四斗入)	小田島文四郎	富岡宇兵衛
28. 10. 4	白米	87 俵 (四斗入)	石川伊助	富岡宇兵衛
28. 11. 6	白米	42.4 石	小田島文四郎	富岡宇兵衛
29. 1. 15	白米	88 俵 (四斗入)	小沢喜三郎	富岡宇兵衛
29. 2. 9	白米	39 俵 (四斗入)	小田島文四郎	富岡宇兵衛
29. 2. 9	白米	56 俵 (三斗五升入)	小田島文四郎	富岡宇兵衛
29. 3. 7	白米	18 俵 (四斗入)	小沢喜三郎	富岡宇兵衛
29. 4. 1	白米	30 叭 (四斗入)	小沢喜三郎	富岡宇兵衛
29. 5. 19	白米	88 俵 (四斗入)	佐々木精吉	富岡宇兵衛
29. 6. 19	白米	87 俵 (四斗入)	藤田源助	富岡宇兵衛
29. 6. 19	白米	14.8 石	第九十銀行	階上銀行
29. 6. 22	白米	20 俵 (四斗入)	藤田源助	富岡宇兵衛
29. 6. 29	白米	88 俵 (四斗入)	小沢喜三郎	富岡宇兵衛
29. 7. 28	白米	86 俵 (四斗入)	佐藤金太郎	富岡宇兵衛
29. 7. 28	白米	106 俵 (四斗入)	佐藤金太郎	富岡宇兵衛
29. 7. 30	白米	40 俵 (三斗五升入)	小田島文四郎	富岡宇兵衛
29. 8. 8	白米	50 俵	高橋文四郎	富岡宇兵衛
29. 8. 13	白米 (中)	86 俵	高橋文四郎	富岡宇兵衛
29. 8. 13	白米 (上)	20 俵	高橋文四郎	富岡宇兵衛
29. 10. 14	白米	61 俵	村上徳松	富岡宇兵衛
29. 10. 14	白米	39 叭	村上徳松	富岡宇兵衛
29. 10. 28	白米	41 俵 (四斗入)	佐々木精吉	富岡宇兵衛
29. 10. 9	白米	44 俵 (四斗入)	高橋文四郎	富岡宇兵衛

明治中・後期における地方米穀商人の集荷活動

白米入荷

出荷人	入荷人	運送店	荷為替の有無	正, 仮(副)の別	送 出 地
藤田源蔵	富岡宇兵衛	北上会社代理店	不 明	仮	花 卷
		北上会社代理店	不 明	正	花 卷
		内国通運	不 明	仮	花 卷
		北上会社代理店	不 明	正	花 卷
		北上会社代理店	不 明	正	花 卷
		北上会社代理店	不 明	正	花 卷
		内国通運	不 明	仮	花 卷
		内国通運	不 明	仮	花 卷
		内国通運	不 明	正	花 卷(里川口)
		北上会社代理店	不 明	仮(仕切書あり)	花 卷
		北上会社代理店	不 明	仮(仕切書あり)	花 卷
		北上会社代理店	不 明	仮(仕切書あり)	花 卷
		北上会社代理店	不 明	仮(仕切書あり)	花 卷
		内国通運	不 明	正	花 卷(里川口)
		不 明	不 明	正	花 卷(里川口)
		北上会社代理店	不 明	正	花 卷
		北上会社代理店	不 明	仮	花 卷
		北上会社代理店	不 明	正	花 卷
		北上会社代理店	不 明	正	花 卷
		北上会社代理店	不 明	正	花 卷
		内国通運	不 明	正	不 明
		北上会社代理店	不 明	正	花 卷
		日本運輸	不 明	正	黒沢尻
		北上会社代理店	不 明	正	花 卷
		北上会社代理店	不 明	正	花 卷
		北上貨物	不 明	正	黒沢尻
		日本運輸	不 明	正	黒沢尻
		北上会社	不 明	正	前 沢
		不 明	有	正	盛 岡
		北上会社出張所	有	正	盛 岡
		不 明	有	正	盛 岡
		日本運輸	不 明	正	黒沢尻
内国通運	不 明	正	花 卷(水沢で出す)		
内国通運	不 明	正	花 卷(水沢で出す)		
北上会社代理店	不 明	正	花 卷		
北上会社	不 明	仮	水 沢		
北上会社代理店	不 明	副	水 沢		
北上会社代理店	不 明	副	水 沢		
北上会社代理店	不 明	仮	花 卷		
北上会社代理店	不 明	仮	花 卷		
北上会社	不 明	正	前 沢		
北上会社代理店	不 明	仮	水 沢		

小 岩 信 竹

表 3 続

年 月 日	商 品 名	数 量	荷 主	届 先
明治 29.12.16	白米	10 俵 (四斗入)	佐々木精吉	富岡宇兵衛
29.12.22	白米	44 俵 (四斗入)	小沢喜三郎	富岡宇兵衛
29.12.29	白米	88 俵 (四斗入)	佐々木精吉	富岡宇兵衛
29.12.29	白米	88 俵 (四斗入)	水沢銀行	階上銀行
30. 1. 5	白米	89 俵 (四斗入)	水沢銀行	階上銀行
30. 1. 6	白米	92 俵 (四斗入)	高橋文四郎	富岡宇兵衛
30. 1. 9	白米	106 俵 (四斗入)	小沢喜三郎	富岡宇兵衛
30. 1.14	白米	105 俵 (四斗入)	小沢喜三郎	富岡宇兵衛
30. 1.26	白米 (上)	53 俵 (四斗入)	高橋文四郎	富岡宇兵衛
30. 1.26	白米 (並)	43 俵 (四斗入)	高橋文四郎	富岡宇兵衛
30. 1.29	白米	25 俵 (四斗入)	佐々木精吉	富岡宇兵衛
30. 1.29	白米	14 俵 (四斗入)	佐々木精吉	富岡宇兵衛
30. 2.23	白米	106 俵 (四斗入)	水沢銀行	階上銀行
30. 2.23	白米	106 俵 (四斗入)	楼沢鹿之助	富岡宇兵衛
30. 3. 2	白米	88 俵	福地恭蔵, 千葉英太	富岡宇兵衛
30. 3. 6	白米	88 俵 (四斗入)	高橋文四郎	富岡宇兵衛
30. 3. 6	白米	88 俵 (四斗入)	水沢銀行	階上銀行
30. 3.11	白米	108 俵 (四斗入)	水沢銀行	階上銀行
30. 3.25	白米	88 俵 (四斗入)	芳賀兵吉	富岡宇兵衛
30. 3.27	白米	108 俵 (四斗入)	水沢銀行	階上銀行
30. 3.27	白米	87 俵 (四斗入)	千葉英太	富岡宇兵衛
30. 5.17	白米	106 俵 (四斗入)	水沢銀行	階上銀行
30. 5.24	白米	88 俵 (四斗入)	福岡兵太郎	富岡宇兵衛
30. 5.24	白米	88 俵 (四斗入)	水沢銀行	階上銀行
30. 5.31	白米	88 俵 (四斗入)	水沢銀行	階上銀行
30. 6.12	白米	76 俵 (四斗入)	小田島文四郎	富岡宇兵衛
30. 9. 5	白米	88 俵 (四斗入)	小田島文四郎	富岡宇兵衛
30.10.26	白米	18 俵 (四斗入)	水沢銀行	階上銀行
30.10. 4	白米	20 俵 (四斗入)	小沢喜三郎	富岡宇兵衛
30.11. 9	白米	10 石	水沢銀行	階上銀行
30.11.15	白米	10 石	水沢銀行	階上銀行
30.11.15	白米	106 俵 (四斗入)	水沢銀行	階上銀行
30.12.17	白米	35.2 石	小田島文四郎	富岡宇兵衛
30.12.20	白米	18 俵 (四斗入)	高橋文四郎	富岡宇兵衛
30.12.24	白米	25 俵 (四斗入)	水沢銀行	階上銀行
31. 1. 2	白米	106 俵 (四斗入)	水沢銀行	階上銀行
31. 1. 6	白米	105 俵 (四斗入)	安田銀行支店	富岡宇兵衛
31. 1. 9	白米	36 石	第八十八銀行	八戸商業銀行
31. 1.24	白米	38 俵 (四斗入)	水沢銀行	階上銀行
年欠 2. 2	白米	14 石	杉本与助	富岡宇兵衛
不 明	白米	89 俵 (四斗入)	佐々木精吉	富岡宇兵衛
不 明	白米	90 俵 (四斗入)	佐々木精吉	富岡宇兵衛

(出典) 富岡家文書

明治中・後期における地方米穀商人の集荷活動

き

出荷人	入荷人	運送店	荷為替の有無	正, 仮(副)の別	送 出 地		
千葉英太	富岡宇兵衛	前沢通運	不明	正	前 沢		
		内国通運	不明	正	黒沢尻		
		前沢通運	有	正	前 沢		
		北上会社代理店	有	正	水 沢		
		北上会社代理店	有	正	水 沢		
		北上会社代理店	不明	仮	水 沢		
		北上会社	不明	副	黒沢尻		
		日本運輸	不明	副	黒沢尻		
		北上会社代理店	不明	仮	水 沢		
		北上会社代理店	不明	仮	水 沢		
		前沢通運	有	副	前 沢		
		前沢通運	有	副	前 沢		
		内国通運	有	正	水 沢		
		内国通運	有	仮	水 沢		
		北上会社	有	正	前 沢		
高橋文四郎	富岡宇兵衛	北上会社代理店	不明	仮	水 沢		
		北上会社	有	正	水 沢		
		内国通運	有	正	水 沢		
		北上会社代理店	不明	仮	水 沢		
		北上会社代理店	不明	正	水 沢		
		不明	有	正	水 沢		
		北上会社代理店	有	正	水 沢		
		不明	不明	正	花 沢		
		不明	不明	正	花 沢		
		北上会社	有	正	水 沢		
		日本運輸	不明	正	黒沢尻		
		不明	有	正	水 沢		
		福岡兵太郎	富岡宇兵衛	不明	有	正	水 沢
		福岡兵太郎	富岡宇兵衛	東北運送	有	正	水 沢
		大橋七右衛門 福岡兵太郎 阿部喜兵衛 佐々木精吉 福岡兵太郎	富岡宇兵衛	不明	不明	正	花 沢
北上会社代理店	不明			正	水 沢		
不明	有			正	水 沢		
東北運送	有			正	水 沢		
内国通運	有			正	水 盛岡		
通運会社	有			正	一 関		
東北運送	有			正	水 沢		
不明	不明	仕切書	花 沢				
不明	有	副	前 沢				
北上会社	有	仮	前 沢				

小 岩 信 竹

表 4 富岡商店

年 月 日	商品名	数 量	荷 主	居 先
明治 27. 2. 9	糯白米	30 俵	小田島文四郎	富岡宇兵衛
28. 1. 13	糯白米	30 個 (四斗入)	佐藤善助	富岡宇兵衛
28. 1. 14	糯白米	12 俵 (四斗入)	杉本与助	富岡宇兵衛
28. 1. 16	糯白米	1 俵 (四斗入)	杉本与助	富岡宇兵衛
28. 2. 26	糯白米	20 個 (四斗入)	佐藤善助	富岡宇兵衛
28. 8. 18	糯白米	10 俵 (四斗入)	小田島文四郎	富岡宇兵衛
29. 1. 18	糯白米	87 俵 (四斗入)	小原喜太郎	富岡宇兵衛
29. 1. 19	糯白米	10 俵 (四斗入)	小原喜太郎	富岡宇兵衛
29. 5. 26	糯 米	5 俵 (四斗入)	小沢喜三郎	富岡宇兵衛
29. 6. 22	糯 米	3 俵 (四斗入)	藤田源助	富岡宇兵衛
29. 7. 28	糯白米	20 俵 (四斗入)	佐藤金太郎	富岡宇兵衛
29. 7. 3	糯白米	21 俵 (四斗入)	小沢喜三郎	富岡宇兵衛
29. 8. 8	糯白米	50 俵	高橋文四郎	富岡宇兵衛
29. 10. 28	糯白米	22 俵 (四斗入)	佐々木精吉	富岡宇兵衛
29. 12. 16	糯玄米	4 俵 (四斗入)	佐々木精吉	富岡宇兵衛
29. 12. 22	糯白米	33 俵 (四斗入)	小沢喜三郎	富岡宇兵衛
30. 1. 6	糯白米	13 俵 (四斗入)	高橋文四郎	富岡宇兵衛
30. 1. 26	糯白米	10 俵 (四斗入)	高橋文四郎	富岡宇兵衛
30. 1. 28	糯白米	5 俵	及川忠助	富岡宇兵衛
30. 1. 29	糯白米	30 俵 (四斗入)	小沢喜三郎	富岡宇兵衛
30. 3. 27	糯白米	21 俵 (四斗入)	千葉英太	富岡宇兵衛
30. 6. 12	白 餅	5 俵 (四斗入)	小田島文四郎	富岡宇兵衛
年欠 2. 2	糯白米	7.35 石	杉本与助	富岡宇兵衛
年月日欠	糯白米	10 俵 (三斗五升入)	富岡忠吉 (小田島方)	富岡宇兵衛

明治中・後期における地方米穀商人の集荷活動

糯米入荷

出荷人	入荷人	運送店	荷為替の有無	正, 仮(副)の別	送 出 地
		北上会社代理店	不 明	正	花 巻
		内国通運	不 明	正	花 巻 (里川口)
		北上会社代理店	不 明	仮(仕切書あり)	花 巻
		北上会社代理店	不 明	仮(仕切書あり)	花 巻
		不 明	不 明	正	花 巻 (里川口)
		北上会社代理店	不 明	正	花 巻
		北上会社	有	正	盛 岡
		北上会社	不 明	仮	盛 岡
		日本運輸	不 明	正	黒沢尻
		不 明	有	正	盛 岡
		内国通運	不 明	正	花 巻 (水沢で出す)
		日本運輸	不 明	仮	黒沢尻
		北上会社	不 明	仮	水 沢
		北上会社	不 明	正	前 沢
		前沢通運	不 明	正	前 沢
		内国通運	不 明	正	黒沢尻
		北上会社代理店	不 明	仮	水 沢
		北上会社代理店	不 明	仮	水 沢
		北上会社	不 明	仮	前 沢
		日本運輸	不 明	副	黒沢尻
		通運会社	不 明	仮	前 沢
		不 明	不 明	正	花 巻
		不 明	不 明	仕切書	花 巻
		内国通運	不 明	仮	花 巻 (里川口)

小 岩 信 竹

表 5 富岡商店

年 月 日	商品名	数 量	荷 主	届 先
明治 29. 8. 15	麦 粉	2 個 (2 貫目入)	小沢喜三郎	富岡宇兵衛
29. 8. 26	小麦粉	4 俵	芳賀兵吉	富岡宇兵衛
29. 8. 24	麦 粉	10 個	(姓判読不能)和吉	富岡宇兵衛
29. 7. 1	麦 粉	5 個	小沢喜三郎	富岡宇兵衛
29. 8. 1	麦 粉	3 叭 (7.8 貫入)	芳賀兵吉	富岡宇兵衛
29. 8. 28	小麦粉	16 貫	青木仙太郎	富岡宇兵衛
29. 8. 13	麦 粉	3 叭 (10 貫目入)	芳賀兵吉	富岡宇兵衛
29. 1. 20	麦 粉	1 個	小田島文四郎	富岡宇兵衛
29. 7. 29	麦 粉	2 個 (7.5 貫目入)	芳賀兵吉	富岡宇兵衛
29. 8. 25	小麦粉	6 叭	佐々木精吉	富岡宇兵衛
29. 8. 11	麦 粉	2 叭	芳賀兵吉	富岡宇兵衛
29. 3. 15	麦 粉	2 個	小田島文四郎	富岡宇兵衛
不 明	麦 粉	10 俵	石川末吉	富岡宇兵衛
29. 7. 10	饅頭粉	10 個	佐々木精吉	富岡宇兵衛
29. 7. 16	麦 粉	5 個	小沢喜三郎	富岡宇兵衛
29. 7. 29	麦 粉	3 個 (7.5 貫目入)	芳賀兵吉	富岡宇兵衛
29. 8. 3	麦 粉	2 個 (8 貫目入)	芳賀兵吉	富岡宇兵衛
29. 8. 14	麦 粉	2 叭 (8 貫目入)	芳賀兵吉	富岡宇兵衛
29. 7. 29	麦 粉	8 個 (8 貫目入)	芳賀兵吉	富岡宇兵衛
年欠 8. 29	麦 粉	4 俵	芳賀兵吉	富岡宇兵衛
29. 8. 3	麦 粉	4 個 (7.5 貫目入)	芳賀兵吉	富岡宇兵衛
29. 3. 24	麦 粉	3 個	小田島文四郎	富岡宇兵衛
年欠 6. 16	麦 粉	15.6 貫	佐藤善助	富岡宇兵衛
29. 9. 2	麦 粉	9 俵 (8 貫入)	芳賀兵吉	富岡宇兵衛
29. 8. 18 (旧)	麦 粉	40 俵 (三斗入)	石川右 (カ) 吉	富岡宇兵衛
29. 10. 9	粉	50 個 (50 斤入)	湊屋国太郎	富岡宇兵衛
29. 7. 29	麦 粉	4 個 (8 貫目入)	芳賀兵吉	富岡宇兵衛
29. 7. 10	粉	7 俵	杉本与助	富岡宇兵衛
29. 10. 23	粉	50 個 (50 斤入)	湊屋国太郎	富岡宇兵衛
年欠 5. 20	麦 粉	2 個	小田島文四郎	富岡宇兵衛
29. 10. 10	粉	36 個 (50 斤入)	湊屋国太郎	富岡宇兵衛
29. 8. 31	小麦粉	16 貫	青木仙太郎	富岡宇兵衛
29. 7. 31	麦 粉	4 叭 (8 貫目入)	芳賀兵吉	富岡宇兵衛
29. 8. 16	麦 粉	3 叭 (7.8 貫目入)	芳賀兵吉	富岡宇兵衛
29. 11. 15	挽 麦	2 箱	芳賀兵吉	富岡宇兵衛
29. 8. 28	麦 粉	8 個	小田島文四郎	富岡宇兵衛
29. 3. 1	麦 粉	3 個	小田島文四郎	富岡宇兵衛
29. 7. 19	麦 粉	4 叭	佐々木精吉	富岡宇兵衛
29. 7. 1	麦 粉	8 個	小田島文四郎	富岡宇兵衛

(出典) 富岡家文書

明治中・後期における地方米穀商人の集荷活動

小麦粉入荷

出荷入	入荷人	運送店	荷為替の有無	正, 仮(副)の別	送地
		三立社	不明	正	黒沢尻
		北上会社	不明	仮	水沢
		不明	不明	仮	水沢
		日本運輸	不明	正	黒沢尻
		北上会社	不明	仮	水沢
		内国通運	不明	正	宇都宮
		北上会社	不明	仮	水沢
		北上会社代理店	不明	正	花巻
		水沢運送	不明	仮	水沢
		北上会社	不明	副	前沢
		北上会社	不明	仮	水沢
		北上会社代理店	不明	正	花巻
		水沢運送	不明	仮	水沢
		北上会社	不明	副	前沢
		三立社	不明	正	黒沢尻
		水沢通運	不明	仮	水沢
		水沢運送	不明	仮	水沢
		北上会社	不明	仮	水沢
		水沢通運	不明	仮	水沢
		不明	不明	仮	水沢
		水沢運送	不明	仮	水沢
		北上会社代理店	不明	仮	花巻
		内国通運	不明	仮	花巻
		北上会社	不明	仮	水沢
		不明	不明	仮	水沢
		不明	不明	仮	宇都宮
		水沢運送	不明	仮	水沢
		内国通運	不明	仮	花巻
		不明	不明	仮	宇都宮
		北上会社代理店	不明	仮	花巻
		不明	不明	仮	宇都宮
		内国通運	不明	正	宇都宮
		不明	不明	仮	水沢
		水沢運送	不明	仮	水沢
		不明	不明	仮	水沢
		内国通運	不明	正	花巻
		北上会社代理店	不明	正	花巻
		北上会社	不明	副	前沢
		北上会社代理店	不明	正	花巻

小 岩 信 竹

表 6 富岡商店

年 月 日	商品名	数 量	荷 主	届 先
明治 29. 7. 22	小 麦	4 俵 (16 貫入)	青木仙太郎	富岡宇兵衛
29. 8. 17	小 麦	5 俵 (16 貫入)	青木仙太郎	富岡宇兵衛
29. 10. 9	小 麦	49 俵 (16 貫入)	青木仙太郎	富岡宇兵衛
29. 10. 10	小 麦	8 俵 (16 貫入)	青木仙太郎	富岡宇兵衛

(出典) 富岡家史料

表 7 富岡商店

年 月 日	商品名	数 量	荷 主	届 先
明治 26. 6. 26	粟	10 俵	佐藤善五郎	富岡宇兵衛
26. 6. 28	精 粟	28 俵	佐藤善五郎	富岡宇兵衛
27. 3. 26	精 粟	28 俵 (四斗入)	小田島文四郎	富岡宇兵衛
27. 10. 27	白 粟	23 俵 (四斗入)	杉本与助	富岡宇兵衛
27. 10. 27	白 粟	56 俵 (三. 五入)	杉本与助	富岡宇兵衛
28. 1. 13	精 粟	30 個 (四斗入)	佐藤善助	富岡宇兵衛
28. 1. 14	精 粟	18 俵 (三斗五升入)	杉本与助	富岡宇兵衛
28. 1. 16	精 粟	2 俵 (四斗入)	杉本与助	富岡宇兵衛
28. 1. 16	精 粟	2 俵 (三斗五升入)	杉本与助	富岡宇兵衛
28. 1. 24	精 粟	38 個 (四斗入)	佐藤善助	富岡宇兵衛
28. 2. 26	精 粟	20 個 (四斗入)	佐藤善助	富岡宇兵衛
28. 6. 21	精 粟	35.2 石	小田島文四郎	富岡宇兵衛
28. 7. 7	精 粟	38 個 (四斗入)	佐藤善助	富岡宇兵衛
28. 8. 18	精 粟	12 俵 (三斗五升入)	小田島文四郎	富岡宇兵衛
28. 9. 14	粟	19 俵	佐藤金太郎	富岡宇兵衛
28. 10. 7	精 粟	8 石	小田島文四郎	富岡宇兵衛
28. 10. 8	精 粟	5.6 石	佐藤善助	富岡宇兵衛
28. 10. 8	精 粟	2.4 石	佐藤善助	富岡宇兵衛
29. 7. 3	白 粟	38 俵 (四斗入)	小沢喜三郎	富岡宇兵衛
29. 7. 30	精 粟	20 俵 (三斗五升入)	小田島文四郎	富岡宇兵衛
29. 10. 28	精 粟	25 俵 (四斗入)	佐々木精吉	富岡宇兵衛
29. 11. 25	白 粟	21 俵 (四斗入)	小沢喜三郎	富岡宇兵衛
29. 11. 25	玄 粟	109 俵 (四斗入)	小沢喜三郎	富岡宇兵衛
29. 12. 22	白 粟	29 俵 (四斗入)	小沢喜三郎	富岡宇兵衛
29. 12. 6	精 粟	2 俵 (三斗入)	佐々木精吉	富岡宇兵衛
30. 2. 5	精 粟	4 俵 (四入)	佐々木精吉	富岡宇兵衛
30. 3. 6	白 粟	2 俵	芳賀兵吉	富岡宇兵衛
30. 6. 12	白 粟	8 俵 (三五入)	小田島文四郎	富岡宇兵衛
31. 4. 5	粟	4 俵 (四斗入)	山地利右衛門	富岡宇兵衛
年欠 2. 2	粟	12 石	杉本与助	富岡宇兵衛
不 明	精 粟	5 俵 (四斗入)	佐々木敬助	富岡宇兵衛
不 明	白 粟	15 俵	小沢喜三郎	富岡宇兵衛

(出典) 富岡家文書

明治中・後期における地方米穀商人の集荷活動

小麦入荷

出荷人	入荷人	運送店	荷為替の有無	正, 仮(副)の別	送出地
		内国通運	有	正	宇都宮
		内国通運	有	正	宇都宮
		内国通運	不明	正	宇都宮
		内国通運	不明	正	宇都宮

粟入荷

出荷人	入荷人	運送店	荷為替の有無	正, 仮(副)の別	送出地
		三戸通運(カ)	不明	仮	三戸
		三戸通運(カ)	不明	仮	三戸
		北上会社代理店	不明	正	花巻
		内国通運	不明	仮	花巻
		内国通運	不明	仮	花巻
		内国通運	不明	正	花巻(里川口)
		北上会社代理店	不明	仮(仕切書あり)	花巻
		北上会社代理店	不明	仮(仕切書あり)	花巻
		北上会社代理店	不明	仮(仕切書あり)	花巻
		内国通運	不明	正	花巻(里川口)
		不明	不明	正	花巻(里川口)
		内国通運	不明	正	花巻
		内国通運	不明	正	花巻(里川口)
		北上会社代理店	不明	正	花巻
		内国通運	不明	仮	花巻(里川口)
		不明	不明	正	花巻
		不明	不明	仕切書	花巻
		不明	不明	仕切書	花巻
		日本運輸	不明	仮	黒沢尻
		北上会社代理店	不明	正	花巻
		北上会社	不明	正	前沢
		北上会社	不明	副	黒沢尻
		北上会社	不明	副	黒沢尻
		内国通運	不明	正	黒沢尻
		不明	不明	仮	前沢
		北上会社	不明	仮	前沢
		北上会社	不明	仮	水沢
		不明	不明	正	花巻
		北上会社	不明	正	金ヶ崎
		不明	不明	仕切書	花巻
		北上会社	不明	正	前沢
		日本運輸	不明	仮	黒沢尻

小 岩 信 竹

表 8 富岡商店

年 月 日	商品名	数 量	荷 主	届 先
明治 30. 10. 23	稗	120 俵	戸 大	富岡宇兵衛
28. 7. 11	稗	15381.5 斤	北村岩吉	富岡店
29. 8. 30	白 稗	40 俵 (三斗五升入)	小田島文四郎	富岡宇兵衛
30. 10. 22	稗	151 俵	戸 大	富岡宇兵衛
30. 11. 4	稗	32 俵	戸 大	富岡宇兵衛
30. 6. 3	稗	144 個	戸館第吉	富岡宇兵衛
30. 10. 28	稗	200 俵	戸 大	富岡宇兵衛
30. 6. 2	稗	150 俵	戸館第吉	富岡宇兵衛

(出典) 富岡家文書

表 9 富岡商店

年 月 日	商品名	数 名	荷 主	届 先
明治 28. 1. 14	胡 麻	4 俵 (三斗五升入)	杉本与助	富岡宇兵衛
29. 4. 2	胡 麻	8 俵	小沢喜三郎	富岡宇兵衛
29. 8. 14	黒胡麻	15 俵 (四斗入)	芳賀兵吉	富岡宇兵衛
29. 8. 19	胡 麻	1 個 (三斗五升入)	小沢喜三郎	富岡宇兵衛
29. 8. 25	胡 麻	1 俵	佐々木精吉	富岡宇兵衛
30. 3. 6	黒胡麻	10 俵	芳賀兵吉	富岡宇兵衛
年欠 2. 2	胡 麻	1.4 石	杉本与助	富岡宇兵衛
年欠 8. 29	胡 麻	2 俵 (四斗入)	芳賀兵吉	富岡宇兵衛

(出典) 富岡家文書

明治中・後期における地方米穀商人の集荷活動

稗入荷

出荷人	入荷人	運送店	荷為替の有無	正, 仮(副)の別	送地
		米内山運送	不明	正	七戸
		不明	不明	記(品物受取書)	不明
		北上会社代理店	不明	正	花巻
		米内山運送	不明	正	七戸
		米内山運送	不明	仮	七戸
		沼崎米内山運送店	不明	仮	七戸
		米内山運送	不明	仮	七戸
		沼崎米内山運送店	不明	仮	七戸

胡麻入荷

出荷人	入荷人	運送店	荷為替の明無	正, 仮(副)の別	送地
		北上会社代理店	不明	仮(仕切書あり)	花巻
		三立社	不明	仮	黒沢尻
		水沢運送	不明	正	水沢
		日本運輸	不明	仮	黒沢尻
		北上会社	不明	副	前沢
		北上会社	不明	仮	水沢
		不明	不明	仕切書	花巻
		不明	不明	仮	水沢

表10 価格動向

年月日	商品名	数	量	価格(円)	1石当り価格(円)	荷為替金高(円)	出荷地境	出荷人
明治 27. 1. 15	白米	35.0	石	265.0	7.6		花巻	杉本与助
27. 2. 2	玄米	35.0	石	240.0	6.9		花巻	杉本与助
29. 1. 18	糯白米	87.0	俵 (4斗入)	320.0	9.2		盛岡	小原喜太郎
29. 1. 19	糯白米	10.0	俵	37.6	9.4		盛岡	小原喜太郎
29. 5. 19	白米	88.0	俵 (4斗入)	300.0	8.5		前沢	佐々木精吉
29. 6. 19	白米	87.0	俵 (4斗入)	320.0	9.2		盛岡	第九十銀行
29. 12. 29	白米	35.2	石	331.0	9.4	250.0	水沢	水沢銀行
29. 12. 29	白米	88.0	俵 (4斗入)	330.9	9.4	250.0	前沢	佐々木精吉
30. 1. 5	白米	35.6	石	335.0	9.4	300.0	水沢	水沢銀行
30. 2. 23	白米	106.0	俵 (4斗入)	411.2	9.7	330.0	水沢	水沢銀行
30. 3. 2	白米	84.0	俵	337.9	10.1		前沢	福地恭藏
30. 3. 6	白米	88.0	俵 (4斗入)	350.0	9.9	250.0	水沢	水沢銀行
30. 3. 11	白米	43.2	石	425.0	9.8	380.0	水沢	水沢銀行
30. 3. 27	白米	43.2	石	440.0	10.2	355.9	水沢	水沢銀行
30. 5. 17	白米	106.0	俵 (4斗入)	500.0	11.8	350.0	水沢	水沢銀行
30. 5. 24	白米	35.2	石	405.0	11.5	260.0	水沢	水沢銀行
30. 5. 31	白米	88.0	俵 (4斗入)	405.0	11.5	308.0	水沢	水沢銀行
30. 9. 20	白米	87.0	俵 (4斗入)	470.0	13.5		盛岡	小原喜太郎
30. 11. 9	白米	10.0	石	155.0	15.5		水沢	水沢銀行
30. 11. 15	白米	106.0	俵 (4斗入)	630.0	14.9		水沢	水沢銀行
30. 11. 15	白米	10.0	石	150.0	15.0		水沢	水沢銀行
30. 12. 10	米	10.0	俵 (4斗入)	55.0	13.8		金ヶ崎	水沢銀行
30. 12. 25	米	10.0	俵 (4斗入)	55.0	13.8		金ヶ崎	山地利右衛門
31. 1. 6	白米	105.0	俵 (4斗入)	650.0	15.5		盛岡	山地利右衛門
31. 1. 26	白米	36.0	石	550.0	15.3	445.0	一関	安田銀行支店
31. 3. 30	米	5.2	石	87.0	16.7		金ヶ崎	第八十八銀行 山地利右衛門

(出典) 富岡家文書